簡易印刷・情報伝達・表現の道具として普及

ーガリガリと音が出る「ガリ版」ー

■ガリ版印刷の由来

「謄写版（とうしゃばん）」を1894（明治27）年堀井新治郎が製造販売した時、日清戦争の陸軍御用の軍事通信に採用され、大量の注文を受けた。これを契機に最新の国産事務用印刷器として世に出た。全国の役所、学校、政治、社会運動、文芸、芸術活動などで情報伝達、表現の道具として広まった。原理はロウ原紙（薄い雁皮紙にロウを塗ったもの）をヤスリ版の上に置き、鉄筆で文字や絵を書くと小さな穴があき、原紙の上からローラーでインクを押し出すと、小さな穴から紙に文字や絵が転写される（孔版印刷）。鉄筆で文字や絵を書くとき、ヤスリ板の上で鉄筆と擦れるガリガリ音がすることから「ガリ版印刷」とも呼ばれた。長所は、いつでも、どこでも、簡単に印刷できて重宝がられた。

謄写版の特別授業　出典『ガリ版文化を歩く』

■堀井新治郎が「謄写版」と命名した

謄写版印刷技法の歴史は、1880年に米国のトーマス・エジソンが鉄筆とヤスリ盤を用いてワックス原紙を製版してスクリーンで装着した謄写版で印刷する謄写を考案した。1884年、エジソンの謄写に適した原紙を開発した事務用品販売社が実用化商品「ミメオグラフ」を販売開始した。

日本に米国の技術を持ち込んだ近江商人堀井新治郎は、東京・神田で謄写版印刷資器材製造販売店「謄写堂」を1894（明治27）年創業し、「謄写版」と命名した。謄写版印刷器はロウ原紙、ヤスリ、鉄筆、ローラー、インクなどで簡単に印刷できるため、明治、大正、昭和30年代まで長期間各方面で使用された印刷器であった。

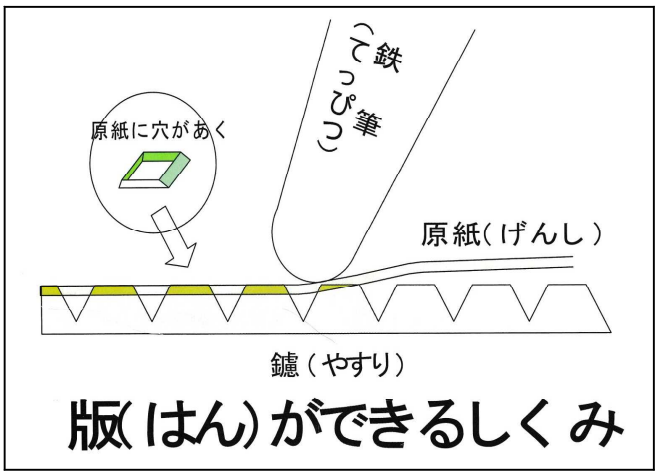
■謄写版印刷のしくみ

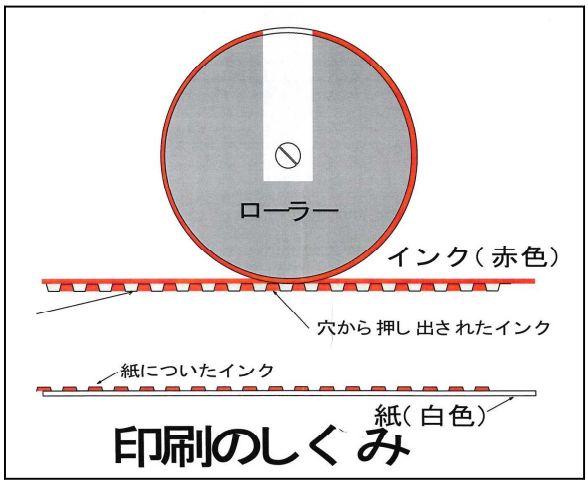
●ロウ原紙：堀井新治郎の発明は、鉄筆用印刷紙（初期の名称）の製作である。謄写原紙の原料紙は、土佐、美濃で漉（す）かれた極薄葉和紙で、ロウを両面にぬったものがロウ原紙である。作り方に手漉きと機械漉きがある。用途別に多種類ある。

●製版用ヤスリ板：初期のヤスリの刻目は斜目で、極めて粗いものであった。各書体のため方眼や斜めヤスリなど荒目から細目と種類も増え、豊かな製版表現を生み出すことができる。

●鉄筆：鋼筆というのが正しく硬さが必要です。文字用、絵画用、罫線用などと謄写技術の発達により多様な鉄筆の種類が増えた。ヤスリの上のロウ原紙に文字を刻む作業を「原紙を切る」の言葉が生まれた。

●インク：謄写インクはローラーで原紙孔を通り印刷されるため、やわらかく、流動性はよいなどが要求される。ガリ版印刷の文字は、用紙上に油のにじみがでるため判別できる。これは油の酸化により生じるものである。





新ガリ版ネットワーク提供

（大橋公雄）